

ネットワーク情報学部主催／情報科学研究所協賛「フリーソフトウェア運動とその未来」

フリーソフトウェアの旗手 リチャード・ストールマン氏が生田キャンパスに

10月29日は専修大学の記念すべき日となった。コンピュータソフトウェアにかかわっている人たちの間で知らない人はいない、それこそカリスマ的な存在であるリチャード・M・ストールマン氏が、本学生田キャンパスで特別講演を行った。

この日、会場となった10号館10301号教室は朝から異様な熱気に包まれていた。10時40分の開演を前にして、10時過ぎには座席はすべて埋まった状態となった。聴衆は本学学生と教員約300人、および、学外の企業や大学から約350人。この中には早朝から席とりをしている人、仙台から朝一番の新幹線でかけつけた人もいる。

まず、ストールマン氏の講演に先立ち、NPO法人フリーソフトウェアイニシアティブ副理事長の鈴木裕信氏(本学非常勤講師)が、「フリーソフトウェア解説」(フリーソフトウェア、オープンソース、プロプライエタリ、フリーウェアなどの用語の説明)を行った。

そして、いよいよストールマン氏がえんじのTシャツに白のコットンパンツというラフなスタイルで登場した。650人余りの聴衆が見守るなか、おなじみの「フリーソフトウェアの四つの自由」の説明でスタートした。ストールマン氏によれば、以下の四つの条件を満たすものがフリーソフトウェアである。(1)プログラムを実行する自由(2)プログラムを変更する自由(3)プログラムのコピーを再頒布する自由(4)プログラムの変更版を再頒布する自由。これらの自由が保障されるためには、プログラムのソースコードが公開されていることが前提となる。

さらに、フリーソフトウェア運動の歴史、フリーソフトウェアの代表格であるGNU/Linuxのことで、そして大学におけるフリーソフトウェアの取り組みについて、学生向けのわかりやすい英語で、身ぶり手ぶりを交えてエネルギーに語った。

特に、フリーソフトウェアは知識の共有を実現するものであり、ソフトウェアをこれから勉強する学生にとって不可欠であるという主張が印象的だった。

最後に、本学の学生を含む6人がストールマン氏に対して勇敢にも疑問を投げかけ、白熱した議論が交わされた。

講演会の終了後、著書にサインを求める学生の行列ができ、会場はいつまでも興奮冷めやらぬ様子だった。

今回の講演会は、本学にとっていろいろな意味ですばらしい経験となった。まず、学生たちにとって、世界的に有名な人物の講演を聴くことができ一生の思い出となったであろう。また、研究者にとって、現在ホットな話題であるソフトウェアの知的所有権を考えるすばらしい機会を得ることができた。そして、本学にとって、日ごろお世話になっている企業や大学関係者に第一級のプレゼントを差し上げ



〈リチャード・M・ストールマン氏略歴〉

1953年3月16日生まれ。フリーソフトウェア運動家、ハッカー、ソフトウェア開発者。

1983年にフリーソフトウェアを開発するためGNU Projectを開始する。1985年にFree Software Foundation設立。GNU Emacs、GDB、GCCなどを開発した中心人物。2007年6月29日にフリーソフトウェアライセンスGPLの新バージョンGPLv3を公開した。



▲著書にサインするストールマン氏

ることができた。

本学の学生のために、はるばる生田緑地まで足を運んでくださったストールマン氏に心から感謝の意を表したい。

(ネットワーク情報学部教授・小林隆)



▲活発に質問が相次いだ



▲鈴木裕信氏

「政策科学専修」第8回シンポジウム

日本の“知恵”を総動員 地球環境対策と日本のエネルギー戦略

エネルギーと地球環境問題を考える大学院経済学研究科「政策科学専修」の第8回シンポジウムが10月30日、神田キャンパスで開かれ、100人が参加した。温室効果ガス削減という具体的な地球温暖化防止対策の第一歩となった京都議定書以降の情勢を分析。「省エネルギー技術先進国」である日本が果たす役割を探った。基調講演のあと、密度の濃いパネルディスカッションが聴衆も加わって展開された＝写真。

